

休屋杉並木

スギが立ち並ぶ参道は、十和田神社まで続きます。東北と北海道を巡歴したことで知られる江戸時代（1603 年～1867 年）の紀行作家、菅江真澄は、1807 年に十和田湖を訪問し「杉が群れ立ったところにある数々の鳥居から入り、並び立つ杉の下路を通っていくと堂がある」と紀行文に残しています。また、当時この場所が十和田神社の巡礼客で賑わい、その多くが宿泊していたことを記しています。「休屋」という地名はこれにちなんだもので、文字通り「休む」「家」を意味します。

ホテル十和田荘の入り口から十和田神社まで続く 900 メートルの杉並木は、菅江の時代の風景を今に伝える、貴重な歴史的財産です。